

「兼ちゃん」

東京女子師範學校教授 岡田美津

(一一) 船漕ぎ

兼ちゃんは、船の艫の方に、母親と妹との傍に居たが、

「あたいにも漕がしてよ。お父ちゃん。」と言つた。

「そうだな、漕がしてやらう。」と吉藏は一服やりながら暢氣らしく漕いでゐた。

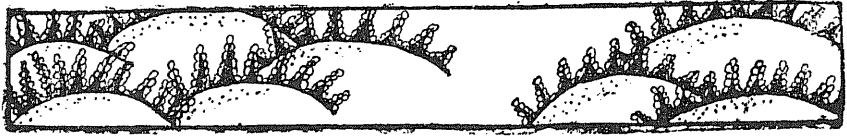
「いゝえ、漕いぢやいけない。」とお芳が絶叫した。

「なせ 母ちゃん。」

「なせでも。そして坐つておいで、船がひつくりかへるといけないから。」

「この子は大丈夫だ。」と父親はいつて「漕ぎたいつていふなら漕が……」

「いゝえ、兼坊はそこに居なければいけない。」とお芳は答へた「新聞によく出てゐる溺死なんていふのは、大概船で席を換へたりするからなんだよ。お前さん知つてるぢやないか……船中で何もあぶない事をしないとおいひだから私や今日一所に來たんだらう。」



「ウン、おめいは恐がりンぼだな。」と好人物らしく吉藏はいつた。

「あゝ恐がりン坊だとも。船が顛覆りかへつてごらん、私や千代坊をどうしていゝか分りはしない。水ん中へお陀佛は有難くないもの。」

「何をいふんだ！ さ、兼坊、教へてやらう……」

「そこ動くときかないよ、兼公。」

「あたゝい漕ぎたいンだもの、母ちやん。」

「いげないつて言つてるぢやないか。千代ちやんをごらんまあおとなしいね。千代さんは漕ぎたがつてみんなを水死させたりしないね、坊や。」

千代ちやんは飴ン棒をあいかはらずしやぶつてゐて何とも言はなかつた。

千代ちやんなんかまだ小さいンだもの。」と兼公は嘲げるやうにいつて「どうして、あたゝい漕いぢやいけけないの。」

ほんとにこの子はまあ！ いけないツたらそれでもういゝぢやないか。

向ふの快走船をごらん。あの向ふの大きなの、黄色い煙出しのあるあれさ。」

「煙出しぢやないや、煙突だい。」と兼公はすましていつた。

「どつちだつて同じさ。」と母は同意して「あの汽船が棧橋に着くンだよ。」



黄色い煙出し……ぢやない煙突があるネ。」

「あたい黄色より煙突の方が好きだな。母ちやん、あたい漕いでもいい。」

「どうしたッていふのさ。いけないッていふのにいつまでも漕ぐ事ばかり言ッてる。もし船がひつくりかへッて、鯨に呑まれたら困るだらう。」

「こゝにア、鯨なんか居ないよ。」

「居るさ。」

「お祖父ちやんが居ないッていつたもの。お祖父ちやんはよく知ッてるンだよ。」

吉藏は笑ひ出した。「一本參つたなお芳、おめい自分の親の言語を疑ふ譯にもゆくまい。」

「それアネ。まあ普通にや鯨は居ないかも知れないが、ソロモンも言ふ通り海ン中に何が居るか分つたもンぢやない。」

「鯨は人間を恐がるンだよ。」と兼公が言つた。

「鯨はヨナ（聖書にある豫言者の名）を恐がらなかつたぢやないか。」と母親がいふ。

「もしあたいヨナだつたら……」

「お前四十日四十夜鯨の腹ン中に居なくちやならない。」

「居るもんか。」



「だつて居るのさ！ 鯨のお腹ン中はいやだらうよ。」

「ううん、ナイフやピンで刺したり突いたりすれば鯨はあたいを出しちまふよ。」と勇猛に兼公は話した。

吉藏は聲をあげて笑つた。お芳はたしなめるやうに、

「兼公が馬鹿氣た事をいつても、お前さん笑つちやいけませんよ。この子はいゝ氣になつて、くだらない事をいつたり、自慢をしたりするぢやないか。……兼坊、お前もし鯨のお腹ン中にあれば母ちゃんくつて泣いて騒ぐんだよ。」

「そんな事するもんか！」

「するとも！ だからそんなナイフだのピンだのを偉さうに言ふもんぢやないよ。」

「ヨナは母ちゃんくつて泣いたかね、母ちゃん。」

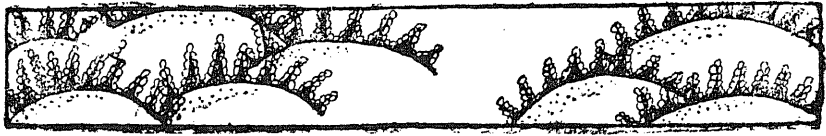
「あゝ、黙つておいで。あの帆をかけた、ちいさい船をごらん。」

「どうしてこの船には帆がないの。」

「帆柱がないもの、な、」と父親が答へた。

「どうして橋がないの、お父ちゃん。」

「だつて、これは漕ぐ船だもの。」



「あたい漕いでもいゝかい。」

「いくどもくゝいけないッて言つたぢやないか。」と母親は叫んで千代坊の飴ン棒の端をしきりと紙で巻いてゐた。

「いつ漕がしてくれるの。」

「今はいけないの。」

「もうすこしすれば漕がせてくれる？ 母ちゃん。」

「今日は漕がせないからもう……」

「ぢやあした漕がせてくれる？」

「え、もう！ こんなうるさい子つてありやしない！ 佛様だつて腹を立つちまふよ。何だつてそう漕ぎたいのさ。」

「たゞ漕ぎたいんだよ。」

「漕がせてやつたらいゝぢやないか。」と父親は穩かにいつた。

「いゝへ、漕がせませんよ！ 私が何十遍といけないくゝッていつてるのにさせたらいゝなんてお前さん、もすこし物が解りさうなものだね。」

「だつてもよ あんなに落膽してゐるから。」



「溺死するよりや落膽した方がいゝ。」ときつぱり言ひ切つて「お前さんどこへ行くの。」とお芳が急に尋ねた。

「あの汽船の波をうけに行くんだ。」と彼はパイプを下に置いて急に力を入れて漕ぎ出した。「何するツていふの。」

「あの汽船の波をうけてな、すこし動搖させやうツてんだ。」

「私やそんな事は澤山だよ。」

「どうしてさ。兼坊はゆれるのが好きだぜ、な、兼坊。」

「あゝ」とつまらなさうに考へこんでゐた兼公は元氣づいて「あたゝい船がゆらくするの好きだよ。」

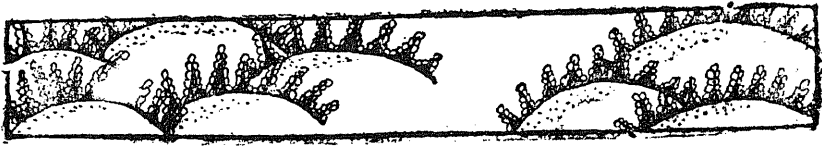
「お前さん、止しておくれよ！きつと汽船の外輪に引かけられちまふ！」

「大丈夫だよ。」

「大丈夫ぢやないよ！私や首も腕も脚ももちぎられて、おまけに溺死までさせられたくないから。」

「外輪で首や何かちぎれるの。」と興ありけに兼公が尋ねた。

「そうとも。」とお芳は答へた。吉藏が進路を變へれのを見て彼女はやつと安心した。



「そうすると首が機關の中へ入つちまふの？」と子供はなほも尋ねた。

「うるさい、黙つておいで！ 何て事を考へるんだらうな子供のくせに。」とお芳は吉藏に對つて話した。

「あたいの首も……」

「よせよ！ 母ちゃんがいやがるから。」

「どうして。」

誰も返事をしてくれないので兼ちゃんも黙つて何の考へてゐたがそれもやつと三四分の間で

「あたい漕いでもいゝ。」

「赤い煙突の船が入つて來た。」と父親がいふ。

「あたい漕いで……」

「やア、あの船に大勢人が乗つてゐる、兼坊あの群衆が見えるだらう。」

「あゝ、あのあたい漕……」

「さ、兼坊。」と懷中をさぐつてゐたお芳は「お菓子上げよう。」

「ありがたう。」といつて兼公は一寸の間おとなしくしてゐたが



「あたししびれが切れちゃつた！ 立つてドタバタしたいな。」と言ひ出した。

「こゝでドタバタ出来ないよ。」と母親は禁止して脚をこすつて、床を叩くやうにしてごらん立つちやいけませんよ。」

「兼公は暫時摩擦つたり叩いたりしたが効力もないらしく、

「チク／＼ピリ／＼ツてする！ だん／＼甚くなる。」と訴へた。

「我慢おしよ、船中で踊つたりはねたり出来ないもの。」と母親は同情して「脚をふるよ うにしてごらん。」

兼公は烈しく脚を振つたが、やはりしびれは癒らないと見え、さも氣持がわるさうな顔をしてゐた。

「あ、ジン／＼する。」といくども／＼彼は言つた。

「可哀さうにな！ しびれの切れるツて奴はいやなもんで。なアお芳。」

「ほんとだよ。私や一度教會でそうなつて死にさうな氣がしたツけ。兼坊まだよくならな いかい。」

「ならない。ひどくなる。」

父も母も本氣で心配し出した。



「しやうがないから上陸つて、足を伸ばさせやうか。」とお芳がいふ。

「そうだな。あんまり長く坐つて居たので痙攣を起こしたんだ。子供はふだんじつとして坐つてゐないからな。坊や、いけないか。」

「足がジン／＼する。」と兼公は答へた。

「お芳。」と吉藏は急に言ひ出した。「すこし漕がしてやつたら、どう……」

「いいない、いけない。船中ではね廻はられるのはかなはない。毎日溺死人があるのは船の中で席を變へるからだよ。」

兼公は、急に擦ることも叩くことも振ることも停めてしまつて、

「あたい、そつと這つて行くよ。母ちゃん。」と言つた。

「それに、この子はまだ年がいかないから。」とお芳はやはり反對した。

「そうぢやないや。初ちゃんなんかあたいより小さいけれど漕ぐよ。」

「お前、足少しよくなつたの。」

「ならない。」と大急ぎで擦つたり、叩いたりを始めて「初ちゃんこの小母さんは漕がせるよ」と言ひ添へた。

「ぢや、お前、初ちゃんとこの小母ちゃんを母ちゃんにしたいだらう。」

とお芳は夫の顔を見ながらいつた。

兼公は聞こえぬかして知らん顔してゐた。

「兼坊、母ちゃんは何ていつたかきいたかい。初ちやんとこの小母さんお母ちゃんにしたらどうだとさ。」

「いやなことツた。」と兼公はてきばさと答へた。「あたいうちの母ちゃんが一番いゝんだ。」

「いやな子！」とお芳は歎息して「ほんとに氣を付けければ、漕がせて上げるよ。」

(一一) 了り



○白酒をこぼしてをかし毛虫眉

零 餘 子

○ほろ／＼と泣き合ふ尼や山葵漬

虚 子

○花の雲かゝりて遠し春日傘

青 々